



皆野中だより 6月号



令和7年6月2日発行 第3号

皆野町立皆野中学校 TEL 62-0432 FAX 62-0076

【校訓】剛き意志 深き愛 自由の胸 純なるこころ

【学校教育目標】人間力で自立する生徒の育成

【目指す学校像】心理的安全性で Well-being を実現する学校

生徒数 1年62名 2年76名 3年73名 合計211名

読書は国の未来を開く

校長 板倉邦弘

5月17・20日には、大勢のご来賓・保護者の皆様にご来校いただき、1.5日開催のような形ではありましたが、体育祭を無事に終えることができました。少し肌寒い17日と夏を思わせる20日となりましたが、大きな怪我や熱中症もなく、皆野中学校生徒の晴れ姿を披露できたこと、そして多くの声援をいただいたことに改めて感謝と御礼を申し上げます。

5月15日(木)には、通信陸上競技予選会が行われ、多くの選手が入賞あるいは県大会出場権を得るという成績を収めることができました。特に次の学総体で活動が終わる陸上部3年生の選手達の雄姿は頼もしく感じました。今月6・7日には通信陸上県大会、19・20日には球技・武道の学総体郡市予選会があります。それぞれの部が心・技・体を高め、目標に向かって頑張りたいと思います。

さて、今号では、「読書」について述べます。近年、書店の減少が全国的に問題となっています。1999年には約22,000店あった書店が2014年には14,000店になり、2025年の現在は10,000店を切り、なおその現象が加速しているのだそうです。理由としては本がネット購入できるようになったことや、スマートフォンやタブレット端末等で「電子書籍」として読めるようになったこともありますが、一番の理由は、日本人全体が本を読まなくなったことだと言われています。諸説ありますが、江戸時代の日本人の識字率は70%を超えていたそうです。同じ時代の西洋列強では30%にも満たなかったといえます。当時日本を訪れた外国人は、普通の庶民が皆、本を読んでいることに驚き、イギリス人は「この国は植民地にできない」と早々に日本を植民地にすることを諦めたそうです。数学者の藤原正彦氏は、「書店数の激減は我が国の将来にかかる暗雲といえます」と述べています。

今年度、皆野中学校では週1回あった「朝読書」の時間をなくしました。しかし、むしろ「週に10分間の読書では足りない、もっと読書をさせたい」という理由もあります。具体的には、家庭学習の一部として5分でも10分でもいいから毎日読書をする、という形に変えました（もし読んでいないようでしたら、ご家庭でもお声掛け願います）。また、わずかの隙間時間でも読書ができるように、通学カバンに本を一つ入れておくことも推奨しています。実際、登校してから朝の会が始まるまで自席で読書をしている生徒の姿もあります。また、町の施策として図書支援員が増員され、月曜日から金曜日まで図書室に職員がいる体制がとられています（11時～16時45分）。全国的に書店が減少している中、貸し出せる図書室の蔵書は増えています。校長おすすめ本（校長私物）も貸し出しています。「人間の成長にとって最高の栄養は本である」「一人の人間の持つ世界の広さ深さは、その人の読書の広さと深さに比例する」などとも言われています。学校だよりもほとんど読書から得た情報をもとに書いています。生徒の皆さん、読書でこの国の未来を開いていきましょう。